

「明暗」再読読書メモ (2021-01-)

大正5年1月、漱石は、リウマチ治療のため湯河原に移り、2月まで滞在した。

4月になると糖尿病の痛みであるとの診断がなされたが、治療を受けながら、朝日新聞に5月26日から「明暗」の連載を始め、12月14日に漱石の死によって未完のままに終わった。

漱石の最後にふさわしい長編小説である。

この作品では、由雄とお延の若夫婦の不安的な家庭生活を中心にして、金策に苦勞する二人に絡む登場人物が劇的に光彩を放ち、人間のエゴイズムが追求されている。

「則天去私」とは、むしろ現実の中にあって、現実にとらわれず、自己の欲望や執着から自由になることなのであろう。

漱石は、「明暗」を書くことによって「欲了」された頭を漢詩によって清めると言っているが、この作品で、高いところから降りてきて、その有様を描き、その治療法を暗示している。

11月21日、「明暗」の百八十八回を書いたが、翌22日は気分が悪くて執筆できなかった。胃潰瘍の再発であった。27日夜中に容態が急変、重体に陥った。12月9日夕方死去。満49歳だった。

いままでこういう流れで読んできました。

「心」→「道草」→「明暗」

「心」

先生と私

両親と私

先生の遺書

「道草」

(モチーフ)

帰ってくる

他者との関係

健三、妻との対話

妻には、妻の論理

妻によって相対化された自分、健三

「明暗」

(モチーフ)

津田、30歳　お延、23歳　大正の新しい時代を生きる夫婦関係の変幻
男と女は一緒になれない
なれないことを悟る
お延への我執く——作為的、意識的、ニヒリスティックな関係を打破したい
津田の虚栄心、自分の存在に気がつかない

明暗を、読みなおす

明暗 大正5年(1916年)5月

会社勤めの津田由雄と妻お延は結婚して半年余りが経つが、二人はお互いの心の奥底にかみ合わない溝を感じている。ち個から冷めた津田と対照的に、お延は夫の愛を執拗に追い求める。やがて津田には清子という元恋人の女性がいたことがわかる。ある秋の水曜日からその後の十数日間にわたる、人間同士の濃密な交流と言葉のやり取りを描く漱石の筆致は圧巻。人間の心理を追求した漱石文学の集大成であると同時に、その死によって未完に終わった遺作。

あらすじ

会社勤めをしている津田由雄は、再発した痔の入院治療をすることになるが、妻のお延と結婚して半年、贅沢に過ごしてきたので、入院費を実家に頼らざるを得ない。

ところが、父には見放され、お延をよく思っていない妹のお秀と大喧嘩する始末。

一方、冷めた態度をとる夫に執拗に愛を求めようとしていた妻のお延は、津田の心に元恋人の清子への断ち切れぬ思いがあるらしいことを知る。

やがて津田は、仲人の吉川夫人から清子が流産の治療で温泉地にいることを知らされ、未練を晴らすようと渡された金で、温泉地に向かうのであった。

(梗概)

津田:欺瞞

お延:主観的な献身と不安

お秀:現実的な所見

清子:愛とは、

家族と家庭

法律上の親子関係と、
感性の枠組みを決定した親子

「明暗」は、「女が愛されて幸せになり、男は愛して幸せになり」というのが当時の一般的な愛に対する性差である。

しかし、お延は愛されているという実感がない。津田は愛しているという実感がない。

だから、当時の愛をめぐる言説そのものが問われ、それまでは、愛があれば解決だ、と思われていた漱石文学が、愛って何？　ということを正面から問いかけたのが「明暗」作品である。

漱石文学の根底を掘り崩しうるインパクトあるテーマ設定なのである。

吉川夫人 自分への批判は働かない、自分が見えない

吉川夫人の性格は、年下の男性を仕切る事がとても好きで、巧みな、そういう女性として設定されている。

女性がエロスを意図的に使うとすれば、母親型になるか、あるいは娼婦型になるか、どちらかで、吉川夫人は典型的に母親型の役割をしながら、自分の性を作らし、また解放するみたいな、そういう性格をもっていて、津田は、程良くそれに従属させられ、操られている。

吉川夫人が興味深い性格だということは、悪魔的なところがあって、

お延に対して好意を持っていなくて、自分の思い通りの型に入れてしまって、わがままなんか言わせないというように操っていきたい無意識の作為を働かせている。

津田に対しては、おまえは前の恋人がどうして自分から離れて行ったかを十分確かめもしないうちに、もう次の女性に鳶打って、そしてその女性と結婚してしまった。前の女性に対して何の未練ももたないのか、と言って、津田を不安にさせる。津田も自分で疑問に思っているところを、吉川夫人に言われてやはり動揺し、清子が温泉場で湯治しているけれども、行って見て、どういう加減で自分を離れたか、確かめてみる気はないのかと吉川夫人にけしかけられて、そこへ行ってしまう。

ですから「明暗」のなかで津田とお延の運命にたいして、意志的な作用をおよぼすとするれば、この吉川夫人が最大の力を持つ人物として設定されている。

この吉川夫人と小林という二人の人物がいるため、津田とお延は、偶然の積み重なりが、そのまま自分たち夫婦の自然な運命になっていくというような波立たない平穏な生活に行くことができなくて、いろいろな形で自然な必然から外れていくことになる。

もうひとつ、お延と津田の実の妹であるお秀との問答。

一つは経済的な援助の問題であるが

もう一つは、お延は、津田が自分と結婚する以前に好きな女性がいて、その女性がなんかわからない形で他の男性と結婚してしまっただけのいきさつがあり、それに吉川夫人が関与していることを全く知らない。けれども、お秀や吉川夫人の口の端々とか、津田の物腰、態度から、何か事件が以前にあって、それは自分の知らないのだけれど、もしかするとそれは自分を排斥するために、津田も含めて周囲で事が運ばれているんじゃないか、という疑いを持っている。それでお秀に自分から言わせたくて、問答をしかけるのですが、なかなかお秀は乗ってこない。

もう一つは、お延と、結婚以前にお延をかわいがって養育してくれた岡本との問答でもお延はひとつの核心をもっていて、自分が愛情を津田に傾ければ、津田がいま、どう思っよう、絶対に自分の方に津田の愛情を傾けさせることができる。又そうさせないではおかない、と心の中で思っている。だから実際よりも自分は津田に愛されている印象を叔父さんに与えようとする。

愛するということ

西洋では、神との契約において、約束を履行する情緒、ないし理性

日本では、自然に思いやる情緒、気持ち

女性における愛とは、献身

男性における愛とは、虚栄心、欺瞞、無意識

明暗にみる愛の形、概念

この時代、親子が「法律」や「金」など、契約関係のレベルで結ばれている。

津田にとって家庭で一番大事なのは「金」で、逆にお延は、「妻」の座に安住している無邪気なお秀に対して、比較を絶した「完全な愛」で「絶対に愛されて見たい」と思っている。

お延にとって、家庭で一番大事なのは「愛」

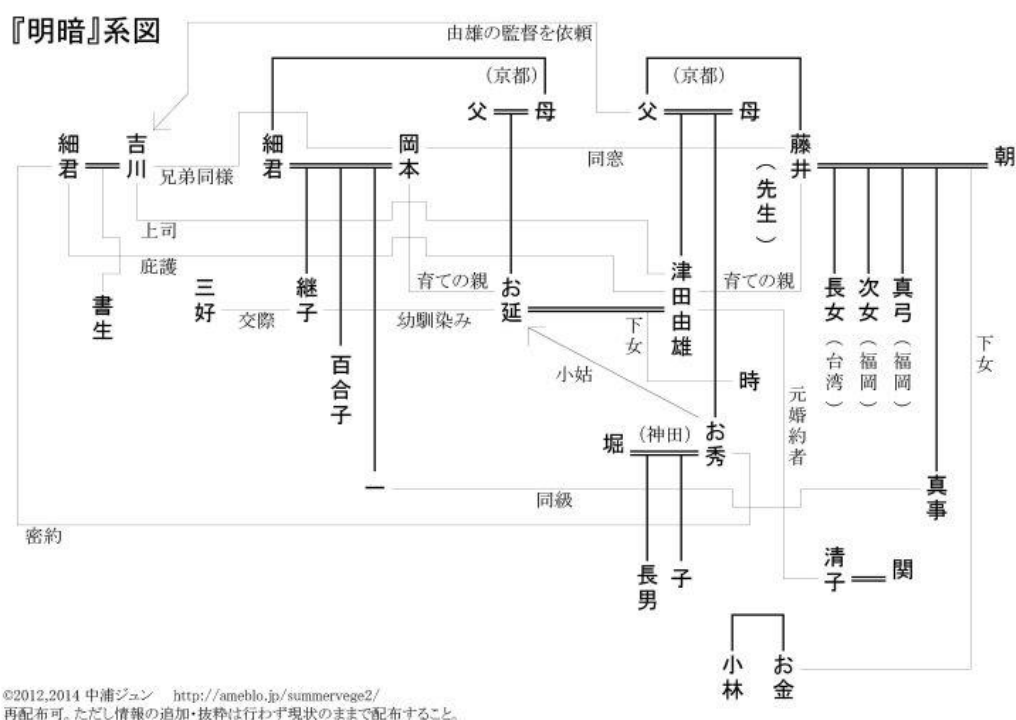
すなわち、津田は親族共同体をより強く「家」のレベルで捉え、お延は「家庭」のレベルで捉えている

家庭では、親密な人間関係のなかに、ほとんど無意識のような文化の枠組みがしまい込まれている。だから、いまでも新婚夫婦はまるで異文化コミュニケーションのようなカルチャーショックを受けることは少ない。

お延は、こうした家庭を意識によって支配する。息苦しい場にしてしまう。

それは、「愛」を意識化することであつたし、津田もそうであつた。

(70年代の読み?)



愛するということ

日本人には愛の文化はあるのか?

西洋では、神との契約において、約束を履行する意思・感性、ないし心理、情緒

日本では、自然に思いやる感性、人間への情緒、気持ち

女性における愛とは、献身すること

男性における愛とは、虚栄心、欺瞞、無意識

「明暗」にみる愛の形、概念

親子が「法律」や「金」など、契約関係のレベルで結ばれている。

津田にとって家庭で一番大事なのは「金」で、逆にお延は、「妻」の座に安住している無邪気なお秀に対して、比較を絶した「完全な愛」で「絶対に愛されて見たい」と思っている。

お延にとって家庭で一番大事なのは「愛」、すなわち、津田は親族共同体をより強く「家」のレベルで捉え、お延は「家庭」のレベル

で捉えている。

家庭では、親密な人間関係のなかにほとんど無意識のような文化の枠組みがしまい込まれている。

だから、いまでも新婚夫婦はまるで異文化コミュニケーションのようなカルチャーショックを受けることは少ない。

お延は、こうした家庭を意識によって支配する息苦しい場にしてしまう。それは、「愛」を意識化することであった、津田もそうであった。

津田:欺瞞

お延:主観的な献身と不安

お秀:現実的な所見

清子:の愛とは、、、

家族と家庭

法律上の親子関係と

感性の枠組みを決定した教育勅語的親子関係

愛と結婚

結婚とは社会的なもので、家と家との経済問題も関わってくると言うのは「それから」にも出てくるテーマですが、それが前面に出てきたのが「明暗」であって、それはサラリーマン津田の「問い」でもある。

と言うのは、今日の設定であるこの「問い」は、通俗的でわかりやすい。

それは、愛の問題にまで問い詰めようとするのがお延である。

このお延にとってアイデンティティーは岡本の実家にあるわけで、実家は、もうお延の分はある意味で見限っている。継子の見合の場面で、お延は自分が引き立て役として呼ばれたんだ、と言う苦い自覚をさせられる。自分は、もう岡本の家では居場所はないんだ、と言うことを痛切にわからせられる。

それを美貌によって見せ付けられ、いかにも女性と言う点で見事です。居場所がなくなって不安定になったお延は、どこに自分のアイデンティティーを設けるか。

もう津田しかない。だから「絶対の愛で愛されたい」と言うわけです。明暗のテーマ設定の結末はお延が担うはずだ、と言う読み方である。

お延が継子の引き立て役にされたことに気づくことと、津田との結婚のどこにこだわっていたかがリンクする。

そしてお延は、津田の妹のお秀が器量望で嫁にもらわれたと言うことも意識している。

女が美貌で男の性的な欲望をひいて結婚に至ると言うことをお延は自覚していて、であるがゆえに、お秀は器量望かもしれないけれど、私のは、本当の愛だ、と言うところに行

くわけです。微妙に切ないところであるのですが、でもそういうところに趣を置くあたりが「明暗」のすごいところ。

器量美しでないならば、津田の中での自分の位置は一体何なんなのだ。

女性であるが故の「問い」へギュウギュウ絞り込んで行く。

津田の過去を知らないわけだけれど岡本の家の人たちに、私の男の選び方が間違っていないかと自慢していて、だから絶対うまくいかなければならない結婚に、自分で追い込み続けているわけです。

そういう中での岡本の叔父さんの津田への評価、津田に対する露骨な評価を、彼女は叔母の口を通して聴くことができた。「あの男は日本中の女がみんな自分に惚れなくちゃならないような顔つきをしているじゃないか」、不思議にもこの言葉は、お延にとって、以外でもなんでもなかった。

彼女には自分が精一杯津田を愛し合えろと言う信念があった。

同時に、津田から精一杯愛され得る、と言う期待も安心もあった。

明治民法は、家長に家督(戸主としての権限と全財産)を1人で相続させる代わりに、家長に家族を扶養する厳しい義務を負わせた。

津田が父に送金させて平然としていられるのは、この規定があるからだ。

そこで、津田の父は自分と津田との間に立って津田に送金するように取りまとめたお秀の夫、堀に責任を擦り付けて、その義務を代行させようとしているようなものだ。

それが津田の見た父の品性だった。

だから、お秀も自分の持ってきたお金が、夫からのものなら「義務」になるかもしれないが、お秀個人のものだから「親切」だと言いつのっているのである。

「義務かい、親切かい、お前の言おうとする言葉の意味は」とお秀に問い掛ける津田には、その機微がよくわかっている。

お秀のお説教は、津田には自分の夫の金を逃れるための「欺瞞」にしか聞こえてこないはずなのだ。

しかも明治民法第 801 条に「夫は妻の財産を管理す」とあるのだから、お秀がいくら「ちゃんと紙に包んである」から夫ではなく、自分が用立てた「親切」だと言いつのってても、結局は夫の「義務」を果たしたことにしかならないのである。

欺瞞と呼ぶ所以である。

明暗の読者もお秀に騙されて、こんな安っぽいお説教に結末を預けてはいけない。

そのためにも津田の周りの人間が津田にこうした「意味」を解説させるために、どのような人間に「更生」させようとしているのかが、その仕掛けを暴いていく。

「らしくモラル」

こうした「らしくモラル」は、自分に与えられた役割だけを真面目に努めることで日々

の生活を保とうとする良心的な都市中間層のモラルである。

こうした保守中間層の「らしくモラル」を内面化できれば、津田の言葉が発せられる保守的で道徳的な文脈を、彼の周囲の人々と共有し、「意味」を読む人になれたに違いない。

逆に言えば、津田は周囲の人々と日常性の行動を共有していないのだ。

しかし、お延を「奥さんらしい奥さんに屹度育てあげてみせる」と言う吉川夫人の良心的で、かつ傲慢な申し出も含めて、それは所詮「欺瞞」にすぎない。

それに、お秀の言葉でも分かろうと言うもの。

明暗では「親切」はほとんど「欺瞞」の別名だと言う事である。

お延は自分の翼で飛べるか

明暗は、お延が自分の翼で羽ばたく「勇気」を持つ物語がしまいこまれている、と読めそうだが、事はそう簡単ではない。お延の勇気は、ご亭主のために出す勇気、とか、夫のために出す勇気と連なり語られる。

主体化とは、自由を得ることではなく、社会の規範を内面化する事だ、と言う意味のことを言っている。

おそらく、こういう考え方を踏まえて性別役割へと「接続」する「良妻賢母」的な愛と、性別役割から「切断」する新しい「女」的な愛、と言う反対のものが併存している。

この両者の折り合いの付け方について結論づける。

お延が主体的な意思を持つ事は、解放をもたらすどころか、無限の未来に向けて自己を鍛錬し続ける勤勉な「近代の主体」へと、お延を導いていくのである。

そして、お延にとっての鍛錬とは、夫の意思を自分の意思として生きる愛の実践であった。

明暗の可能性とは自らの声を発する者と歩む、と言う女の主体性にあるのではない。

そうではなくて、女性が主体的であることが、いかにシステムを補完する主体への従属化と密接化の結びつけられているかを暴露している点にある。

再々読（漱石没100年、生誕150年のころ）

主な登場人物とその相関関係、およびバックグラウンド：

人物関係

関係・主体		親戚	絡み？	知人
夫婦	お延	岡本	吉川夫人	小林
	津田	藤井		
兄妹	お秀			

スポット・場面、対人物

スポットライト	連載回	場	面	相手
津田	3	自宅	(1) 妻	お延
	14	吉川家	(3) お世話	吉川夫人
	16	会社		吉川
	18	自宅	(1) 妻	お延
	25	藤井家	(2) 親戚	藤井家、他
	33	酒場	(4) 旧友	小林
	38	自宅	(1) 妻	お延
	41	病院/手紙		
お延	45	芝居	(2) 親戚	岡本一家
	52		(3) お世話	+吉川夫人
	60	岡本家	(2) 親戚	岡本一家、他
	79	回想シーン	(1) 夫	津田
	81	自宅	(4) 夫の旧友	小林
津田	92	病院	(1) 妹	お秀
	104		(1) 妻	+お延
	116		(4) 旧友	小林
お延	124	堀家	(2) 夫の妹	お秀
津田	131	病院	(3) お世話	吉川夫人
	145		(1) 妻	お延
	153	病院/退院		
	154	自宅	(1) 妻	お延
	156	仏蘭西料理店	(4) 旧友	小林
	168	旅路		
	171	到着		
津田・清子		旅館		清子

◇津田家

・津田由雄 30才 会社勤め ー主人公ー

父より、生計の不足分の送金を受けている。 但し、盆・暮れの賞与でその何分かを返済することを条件としている。

しかし、この夏は是を履行しなかった。 東京に在住。

・お延 (由雄の細君) 23才

結婚して約半年。　まだお互いの心根が判らない状態である。

- ・父　官吏生活の後、実業へ単身し、今は引退して京都に移り、老夫婦で隠居している。
- ・妹、お秀　24才　堀の細君。　子供二人有り。
器量よしのお秀、津田が父から送金が受けられるように、保証人の役目を担っていた。
派手好きのお延を嫌っている。

◇藤井家

- ・父の弟　由雄の叔父に当たる。　活字で飯を食っている。
父が方々渡り歩く官吏生活のため、教育上津田を弟に託して、いっさいの面倒を見て貰うことにした。
- ・叔母　43～44才（お朝）　子供（真事）10才位

◇岡本家

お延が小さい内から世話になっており、実の親代わり。
岡本と吉川とは兄弟同様に親しい関係。
姉娘継子　20才、妹娘（百合子）14才
子男子、一（はじめ）　10才位

◇吉川家

津田と同じ勤務先の関係（重役らしい）で、平生から一方ならぬ恩顧を受けている勢力家。吉川は、津田の父親の学友。　津田の仲人、就職もそういう縁による。
特に吉川夫人には、津田は、お延と結婚する前の清子という女性の件で、秘密を共有している。　この夫人とお延とは肌が合わない。

◇小林

藤井叔父の雑誌の編集をしたり、校正をしたり、その間に自分の原稿を書く。　朝鮮に渡って或る新聞社に雇われることになり、朝鮮行きを決心する。　自ら無頼と云うように津田やお延の周りに出没し、金銭をせがんだり、結婚前の津田の秘密をお延に匂わせたりする。

◇関家

清子は昔、津田が結婚をしようとしていた女。　吉川夫人もその気でいたのに、どうい理由か判らないが、間際になって清子は関と結婚してしまう。　津田や吉川夫人は、お延にはそのことは知られないように振る舞ってきたが、その謎を聞くために湯河原温泉行きを吉川夫人から勧められ、津田は出かけて行く。

『明暗』という小説は、今までの作品と少し変わっている風である。

会話の中で、それぞれの話し手の心理状態やら、気持ちの変化を、相手の心理状態を述べながら、しゃべっている点。

また、主人公の立場にならずに、客観的な立場で観察している。

対話の面白さ：

・津田とお延の会話の例

手術が必要になって、その手術代やら、毎月の不足分に対する父からの送金不履行で、金策をする必要の時の対話は、結婚間もない二人の、お互いの思惑やら、見栄が働き、交わされる会話は、心理状態をよくあらわしていて、おもしろい。

・その他

—津田が手術の日、岡本の家からお延に是非お芝居を見に来るように誘いがあり、その際の夫婦のやり取り。 疑ぐりと、夫としての品格に関わる気、女から甘く見られるという苦痛など、我の戦い。 揺れ動く心が表現されていて、おもしろい。

—吉川夫人とお延の、芝居見物の時に交わされる会話。

—津田が入院中に、自宅を訪れてきた小林と対座する、お延の丁々はっしのやりとり。

—岡本の家での、叔父とお延の間で交わされる人情味のある会話。

—病室で、津田に詰め寄る妹お秀の会話。

などなど、漱石作品の魅力を十分感じさせてくれる。

【ネタバレ情報】

国民的作家の代表作にして超ロングセラー……。

その程度の認識で手を出すと手痛いしっぺ返しを食らう、難解本である。

累計でおそらく数十万冊、ことによると百万冊を超える部数が出ているかもしれない。

しかし、そのうちの何割が読了されたであろうか。そして何パーセントの読者が、この本に何が書いてあるか、を理解しえたであろうか。

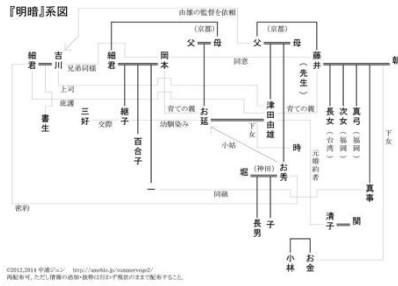
私自身も、大学生時代に読んでいた（通読に至らず）のだが、印象が残っていない。

つまり、まったく読めていなかったのである。

本書の漱石は、読者サービスというか、読みやすくするための工夫を一切手放してしまい、「ついて来られる奴だけ、ついて来い」と言っているように見える。

一例を挙げれば、人物の呼称である。津田が視点人物になっている回では、叔父と言えば藤井のことであるが、お延が視点人物になっている回では、叔父と言えば岡本のことだ。

登場人物たちの関係が頭に入っていなければ、誰のことを言っているかもわからないのだ。やむなく系図を書きながら読むことにした。



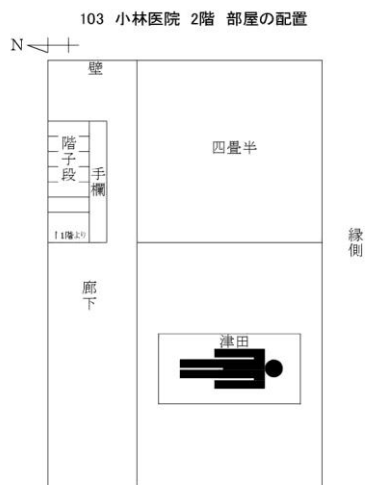
同様に、第五十二回の席順

52 食堂の席順

吉川夫人	飛沙
岡本の叔父	川呂
三好	子継
岡本の叔母(*)	

*「食卓の角」の意味がわかりかねて、こう解釈してみた。
 こう解釈すると空席ができないので一応辻褄は合う。

も、第百三回の部屋の配置



も、図を書いてみなければ理解できない。

また、本書のクライマックスである津田とお秀の兄妹喧嘩が、いかなる論理的必然性によって津田の清子訪問という展開を呼びよせるかは、同じ所を何度も読み返し、さらには書かれていないことを推測で補って、読まなければ理解できない。

こういうわけで、相当な難物なのである。

しかし、苦勞して読めば得るものは大きい。
なぜって、本書は日本ばかりか、世界に冠たる一級の心理小説なのだから。

ヒロインのお延は、身内を含めて他者という他者を信用しない。
他者は必ず彼女を出し抜こうとしていて、世間は戦場である。
そういう世界観を持つがゆえに、彼女は常に知恵と勇気によって他者に競り勝ち、世間を渡りつづけるという苦しい生きかたを強いられる。
夫の津田も、義妹のお秀も同じ病気にかかっている。
まさしく、現代人の心の闇がテーマなのだ。
本書の末尾に登場する、唯一の脱力系人物である清子は、そんな彼らの対極に位置すると同時に、彼らに救済の途を指し示すはずだった。
それは作者の死によって永遠の謎となってしまったけれど。

ところで、本書については、ヘンリー・ジェームズの**影響**がかねてから指摘されている。
今回読んでみて、影響を実感した

ヘンリー・ジェームズは、アメリカ生まれで、イギリスで活躍した作家・小説家。
英米心理主義小説、モダニズム文学小説の先駆者。兄は**プラグマティズム**を代表する哲学者ウィリアム・ジェームズ。

まず、吉川夫人というジェームズ的人物の存在である。
若い男を庇護し、交際する女性の斡旋も買って出るヤリ手のオバサンであるが、既婚者同士の密会を手引きをしたり、彼女の気に染まないヒロインの性格を矯正しようとして陰謀をめぐらすことも辞さない、悪魔的側面を持っている。

もう一つは、会話や思考を描写するのに具体的な内容には触れず、延々と隠喩を書きつらねてゆく、独特の文体である。
たとえば、感情と理窟の纏れ合った所をほぐしながら前へ進む事の出来なかった彼等は、**何処までもうねうね歩いた**（第九十七回）。

ここでは、彼らは実際に歩いているのではない。なかなか核心に到達しない会話を、歩行の隠喩で描写しているのである。

他にも、最初夫人の名前がお延の唇から洩れた時、彼女は二人の間に一滴の霊薬が天から落されたような気がした。**彼女はすぐその効果を眼の前に眺めた**（第百二十五回）。

ここでは、いわゆる効果は目に見える実体ではなくて観念にすぎないのだが、視覚的な隠喩を使って描写しているのでこういう表現になるのである。

こういうところがジェイムズ節なのだ。ジェイムズを読んだことのある人ならすぐ思い当たるだろう。

読んでいる最中に気がついたのだが、私は今、漱石が本書の執筆半ばで死去した年齢以上になっているが、

時代が異なるとはいえ、とても同じ年齢程度とは思えない深い思想性と、円熟した筆さばきに、文豪の偉大さを思わずにいられない。

（注1）一方で、そんなお延の生きざまは健気で美しい。本書の功績の一つは、お延という人物像を造形した点にある。本書を最後まで読み通させる力の源泉は彼女の魅力であろう。

しかし、彼女自身のために言うならば、そんな苦しい生き方は絶対にやめた方がいい。

「猫を追悼する」

『吾輩は猫である』を処女作とした夏目漱石は、未完の『明暗』を絶筆として、1916年（大正5年）49歳で他界している。僅か10年の執筆人生で、漱石は不朽の名声を残したわけだが、『明暗』は立体的な心理小説として、それまでの作品とは異質の読み応えを持っている。

『明暗』の醍醐味のひとつは、心理戦の実況中継にある。勿論、対戦はお馴染みの組み合わせ、夫婦である。けれども、従来の夫婦と違い、『明暗』の妻お延は詰め寄ってくる。夫に詰め寄るばかりではなく、読者に迫ってくるのだ。

迫ってくるのは妻だけではない。それまでの作品群で置物のように配置されていた女性陣は、これ見よがしに生々しく情念を蠢(うごめ)かせる。

この迫真は、漱石が夫からの視点に加えて、彼女らの内面にも視点に移して対局を構成しているからで、それによって彼女らは主体的に行動し始める(かのごとく見える)。

見栄に強情、妬(ねた)みに僻(ひが)み、女たちの気魄は蔭に日向(ひなた)に跋扈(ばっこ)して、それらが読者に迫ってくるのだ。

しかも、心理戦が1対1だけでなく三つ巴ともなると壮観で、臨場感を増す。もはや『吾輩は猫である』に見られるような落語の態でこそないものの、文章のトントン拍子は変わらない。

会話の妙もさることながら、腹の内の独白からト書きにいたるまで、拍子木の冴えが光る。ひと区切りごとの閉めも見事というほかなくて、これなら朝日新聞の朝刊がさぞ待ち遠しかったことだろう。

漱石にとっては、余程の事情があったとみえて、金銭の貸借と三角関係は本書でも登場し、日常風景ならびに重要設定となる。

登場人物はというと、夫婦それぞれの叔父・叔母を筆頭に入り乱れ、従来の構成よりも立体的な人の世の縮図を展開させる。

ならば、人間関係も一層もつれ、傲慢・屈辱・企み・優越感・悔しさ・驕(おご)り・無関心・蔑(さげす)み等々、人情の実例に事欠かない。

結果として、『明暗』は、意地と勘ぐりの饗宴となっている。

この勘ぐりたるや、折に触れては被害妄想と紙一重になって、饗宴を濃厚にする。詰まるところ、この濃さは漱石自身の意地と勘ぐりの濃さに匹敵すると勘ぐるほかない。

自分にしがみつき、つまりは意地と打算に突き動かされて、勘ぐりに余念なく、始終相手の下心を先どりしては、次の一手を目論んでいるのが、主人公の津田夫婦というわけだ。

余談ながら、似たように多忙な主人公として、いまや芥川賞作家となった西村賢太作品が彷彿される。ところが、西村の愛嬌に満ちた野生エゴに比して、津田が振り回すのは頭脳優位の文明エゴで、動物的エゴはすっぽりと置き去りにされている。

そのせいかな否か、津田(夫)ほど味も素っ気もない主人公も珍しくて、小賢しい知恵こそ巡らすものの、野心もなければ責任もない。なによりも愛がない。

良きも悪しきも小林から野心や怨念を抜いた出し殻のような男だ。実際、津田は小林の影法師のように思えてもくる。嫌われ者の小林は、自分が何故わざわざ嫌われることをするのかと弁舌を振るう。小林こそは、登場人物のなかで唯一内省をする人物だが、その内省すらも理詰めで汲々としている。

意地と勘ぐりと理屈をすし詰めに担わされた群像は、窮屈に生きるがゆえに救いのない漱石の分身百科目録のようなものだ。

分身が織りなす喧(かまびす)しきなかで、果たして清子はどういう位置づけを配されていたのか。漱石の信奉者のなかには、清子を則天去私の体現と読む向きもあるようだが、わたしには到底できない読解だ。

当面の登場場面からは、置物としての女性の再来としか思えない。

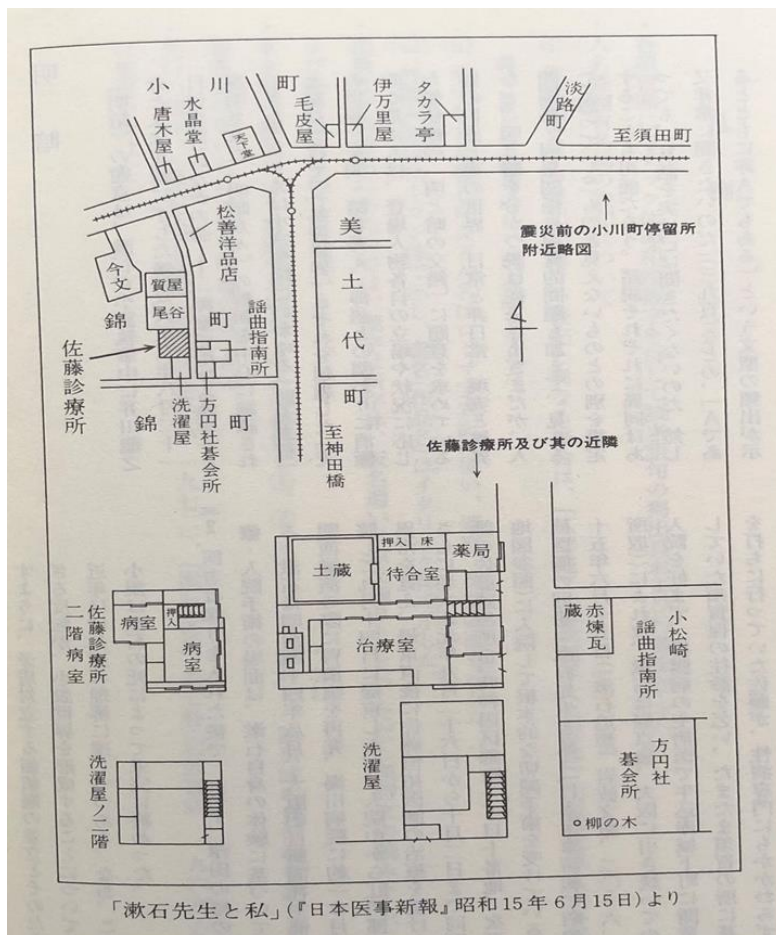
清子の登場が、津田夫妻をどう変えていくのか。果たして、この分身群像に救いはもた

らされるのか。

漱石が清子を温泉場に登場させるなり、他界してしまったことは、未完の推理小説が放たれたようなもので、大いに悔やまれてならない。

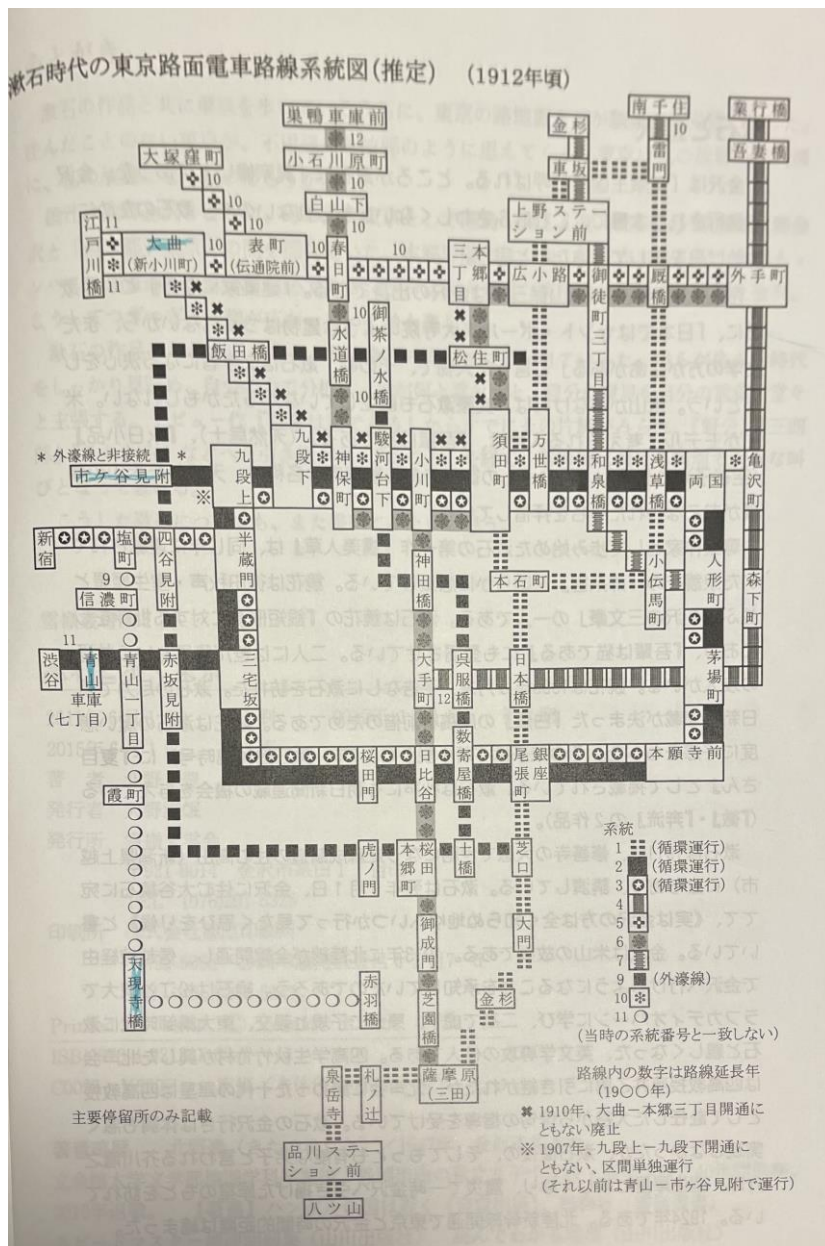
『明暗』という喧しくも迫力のある実況中継を改めて眺めると、『吾輩は猫である』から猫一匹を引き算した世界に見えてこないでもない。猫一匹が退場すると、登場人物は剥き出しになって、間三尺を設けること叶わず、絡み合うことを余儀なくされる。猫の視点という諧謔が失せると、陰惨な人の世が残る。吾輩の知識欲と怠惰には、小さき者への愛を呼び醒ます慈悲効果があった。吾輩がビールを飲まされて水瓶(みずがめ)に落とされてからというもの、漱石の小説は興味深くはあっても、どこか居たたまれない。

猫に冥福。



資料：病院の図

「彼岸過迄」の小川町交差点の探偵もどきのミステリアスな場面の解説につかえる街鉄路線図。



再々々読 (2020-11)

明暗カレンダーとして読んでみる

「明暗」 曜日カレンダー

大正 4 年

① 10 月 27 日 (水曜) 第 1 回～第 8 回 (新聞掲載回数) T 5・5・19～5・25 (執筆日)

物語は津田が会社帰りに寄った診療所のシーンから始まる。

家の門の前、津田の視線の先でお延が登場する。お延は向かいの家に雀が巣喰っていると嘘をつく。

- ② 10月28日(水曜) 第9回～第15回 5・26～6・1
津田は会社の帰りに反対回りの電車に乗って吉川邸に行き夫人に手術のことを話す。
「津田対吉川夫人」前哨戦(10～12、全3回)
- ③ 10月29日(金曜) 第16回～第18回 6・2～6・4
津田は次の日から休みを取ることにして、再び会社帰りに病院によって入院の日取りを決める。
- ④ 10月30日(土曜) 第19回～第38回 6・5～6・24
入院の前日、津田は午前中を無為に過ごし、午後から病気の報告と御無沙汰見舞いを兼ねて叔父の藤井を訪ねる。家の近くで従弟の真事に会う。津田と藤井叔母・叔父のつまらぬ争い。藤井の家には小林が来ていて、津田はその夜嫌々一緒に酒場に行く。
「津田対真事」(22～24回、全3回) (6・8～6・10)
「津田対藤井叔父叔母」(25～32回 全8回) (6・11～6・18)
「津田対小林」一時対決(33～37回 全5回) (6・19～6・23)
- ⑤ 10月31日(日曜) 第39回～第57回 6・25～7・13
入院当日、津田とお延はいっしょに病院へ行く。短い手術の間をお延は電話をかける。手術の後お延は津田の許しを得て岡本一家・吉川夫妻と観劇。継子の見合いも行われた。その食事の席で吉川夫人とお延への静かな戦いの火花が散る。
「お延対吉川夫人」前哨戦(52～54回、全3回)。 (7・8～7・10)
- ⑥ 11月1日(月曜) 第58回～第79回 7・14～8・4
「お延は観劇の礼に岡本の家を訪ねる。家の近くで従妹の継子に会う。お延と岡本叔父のつまらぬ争い。そして岡本家で断続的に続く長い議論。
お延はこの日見舞いに行かない。津田は終日安静にしている(はず)。
「お延対岡本」(60～68回、全9回)。 (7・16～7・24)
「お延対継子」(70～73回、全4回) (7・26～7・29)
- ⑦ 11月2日(火曜) 第80回～103回 8・5～9・7
→(自家を舞台にして進行)
小林が外套をもらうため津田の自宅へやってくる。病院へ行こうとしていたお延は出鼻をくじかれるが、小林の思わせぶりの挑発に、つい乗ってしまう。
「お延対小林」対決(81～88回 全8回)。 (8・6～8・13)

→(病室を舞台にして進行)
前日お延から電話をもらったお秀が見舞いに訪れる。お秀は津田の(お延に由来する)改まらない浪費癖と浮ついた気持ちを責めたて、津田と大喧嘩になる。
「津田対お秀」対決(91～102回 全12回) (8・16～8・27)

そこへ小林を追い返した お延をやってくる。お延は病院の玄関で若い女物の下駄を見て猜疑心にかかるが、少し立ち聞きをして病室に居るお秀であると知る。お秀と津田の喧嘩は、お秀対津田お延の連合軍に引き継がれる。お延はカタルシスを得る。

「津田・お延対お秀」 対決 (104～110回、全7回)。 (8・29～9・4)

⑧ 11月3日 (水曜) 第114回～第152回 9・8～10・16

この日の進行は少し入り組んでいるが漱石の書いた通りに取り上げることにする

→ 午前から午後 (病室を舞台にして進行)

午前中津田は前日の争いを反芻しながら無為に過ごす (114～111回)

午後小林が病室を訪ねる。言いたい放題を言う。津田は苦し紛れに小林に餞別と送別会を約す。

「津田対小林」 二次対決 (116～121回 全6回) (9・10～9・15)

小林は津田に、お秀が朝のうちに吉川夫人を訪問し、その後 (小林が来ていた) 藤井へも回ったことと、吉川夫人がこれから見舞いにやって来るだろうことを告げる。津田は夫人に会わせたくないのをお延に「今日は来るな」という手紙を車夫に託す (122回)

→ 午前～午後 (自家～掘家を舞台にして進行)

(122回、叙述がいったんお延の家に戻る) お延はいつもの通りの生活に戻り午前中に家事を片付ける。昼に銭湯に行くが、その留守にお秀がやってきたと聞き、驚いて前日の争いの補足も兼ねてお秀の家に行く (122～123回)

「お延対お秀」 対決 (124～130回 全7回) (9・18～9・24)

お秀は朝のうちに吉川夫人を訪問して津田の温泉行について情報を得たらしく、前日はまた別の余裕さえ見せる。お延また肩透かしを食わされる。

→ 午後 (病室を舞台にして進行)

小林がやっと帰った後の病室に吉川夫人が見舞いに訪れる。夫人は津田に清子と会うための湯治行を承諾させる。と同時に お延をもっと奥さんらしい奥さんに育て上げてみせる、と津田に請け合う。

「津田対吉川夫人」 二次対決 (131～142回、全12回)。 (9・25～10・6)

→ 夕方 (病室を舞台にして進行)

お延は堀の帰りにそのまま病院へ寄ることにしていた。しかし お秀との戦いに半ば破れて思うところがあり、いったん自宅へ引き返す。そこで津田の今日は来てはいけないという手紙を読み、体勢を立て直ししてすぐ病院へ向かう。(143～144回)

吉川夫人の帰った後の病室で津田とお延の最初で最後の大きなバトルが行われる。津

田お延の 直接対決としてはこれが最後か。

津田対お延」 最終対決か (145～152回、 全8回) (10・9～10・16)

⑨ 11月4日(木曜)から(⑩ 11月5日 ⑪ 11月6日を経て) ⑫ 11月7日(日曜)まで

第153回 10・17

津田の経過は良好。日曜日退院する。

⑬ 11月8日(月曜) 第154回～第166回 10・18～10・30

小林送別会の日、お延は近々 夫のために勇気を奮うだろうと予言する。

「津田対小林」 三次対決(155～166回、全12回) (10・19～10・30)

⑭ 11月9日(火曜) 第167階～ 第177回 10・31～11・10

津田が湯治に発つ日。軽便の駅から迎いの馬車に乗る。夢幻的なシーンが描かれた後、宿に到着する。温泉での更なる幻想的なシーン。津田は現実感を失い、自己及び清子の亡霊を見たかのように感じる。

⑮ 11月10日(水曜) 第178～第186回 11・11～11・21

津田が女中の先導のもと清子の部屋を訪れる。実質的な再会。

「津田対清子」(183から188回、全6回) (11・16～11・21)

小説はここで突然終わっている。

明暗の位置づけ

「則天去私三部作」は完成される(はずだった)。

- 1, 初期三部作 「三四郎」「それから」「門」
- 2, 中期三部作 「彼岸過迄」「行人」「心」
- 3, 晩期三部作 「道草」「明暗」「書かれなかった最後の小説」

漱石の三部作と言えば「三四郎」「それから」「門」というのは定番だが、続く「彼岸過迄」「行人」「心」も、短編を並べて一個の長編にするという手際においては、これも立派な三部作である。

そして、その後に来る晩年の三部作とは「道草」「明暗」と、もう一つ、これは想像するばかりであるが「明暗」の後に書かれたであろう漱石の(真の)最終の小説があるのだろうか妄想。

(水村美苗、「続明暗」が、ある)。

「見合い結婚した津田とお延の夫婦と、津田のかつての恋人清子の三角関係を軸に、エ

ゴイズムの行方を追及した漱石の「明暗」は、漱石の死によって未完のまま閉じられた近代小説の傑作が75年ぶりに書き継がれた。

東京を遠く離れた温泉場で二人きり、久々に対面を果たした津田と清子はどうなるのか？漱石の文体をそのままに描く続編のようです。←（まだ読んでいません）

実際、漱石は、この「明暗」をどのように、結んでいったのか、、、

そして、「明暗」のつぎの作品は、妄想は広がるばかりです。

結局、書かれることのなかった小説は、漱石が意図的に最後までとっておいたもので、それは、初恋の成就、あるいは不成就を扱った作品ではないか。漱石の最晩年に使っていた手帳に「男2人が1人の女を思う。1人は消極、1人は積極。後者ついに女を得。前者女を得られて急に寂しさを強く感ずる。いたたまれなくなる。人生の意味を疑う。遂に女を口説く。女（実はその人を密かに愛していることを発見して戦慄しながら）時期、遅れたることを諭す。男聴かず。生活の真の意義を論ず。女は姦通か、自殺か、男を排斥するかの三方法を持つ。女自殺する（と仮定する）。男、茫然としてまた自殺せんとして能わず。僧になる。また還俗す。或るところで彼女の夫と会す」という記述メモがある。

これは「それから」や「門」のメモではない。「明暗」のメモではなおさらない。「初恋」という俗な言い方を避けて「未練」に置き換えれば、未練の追求をというテーマは「明暗」（そして「道草」さえ）にも重なるが、それは漱石によくあるように一部重なっているだけである。

この手帳は「明暗」を書き始める年の創作ノートである。体力の衰え著しかった漱石は、「(明暗)を書き進めながら、この残された「構想」(実際は自作の構想ではないかもしれないが)と「失われた初恋」(それは生と死のような、あるいは父と母のような、人間にとって、ただ一つのものである)という積年のテーマを併合させて、自身の最後の小説にしようと思っていたのではないだろうか。

ではこの最後の三部作の共通項(テーマ)とは何か。それは漱石が自ら「則天去私」という言葉でとりあえず、その答えらしきものを指し示している。

漱石は「道草」で始めて登場人物の言動に自己の文学的斧鉞(ふえつ)を加えないやり方を試みた。

それまでの漱石はどちらかと言えば作中人物全てに対して、自分が黒子になって彼らをコントロールしてきた。主要な人物に対しては黒子どころか、生身の漱石が本人達に溶け込むようにして、行動を律した。

「道草」から漱石は趣向を変えて、登場人物に深入りすることを避けるようになった。漱石本人たる健三も含めて、「道草」の人物は、これまでのような漱石的な主張がない。

「道草」の人物の振る舞いには「漱石臭」がない。

当時の（そして今も）読者・評者がこの小説に対して貼り付けた（漱石の嫌う）いくつかのレッテルは、当時の（そして今も）漱石の新しい試みがどのように理解（誤解）されたかを示している。

これまで作品に漱石的主張の充満していることを理由に漱石を受け入れなかった一部の評者は、まさにその漱石には関係のない理解、もしくは誤解を理由として、「道草」から自分たちの態度を改めたのである。

新しい方針は続く「明暗」にも装いを変えて、受け継がれた。

「明暗」の人物たちは、（たとえ漱石丸出しだっても）もうこれまでのようには自らの一挙手一投足まで、漱石の意のままになるということを示さなくなった。

彼らはより自分勝手に行動しているように見える。これは漱石が意図的に企んだというよりは「道草」で何らかの解放感を得たためとも考えられるし、あるいは単に健康上、年齢上の理由によるものかも知れない。

しかしこのことを漱石は、「則天去私」と呼んだのである。

「天」とは漱石の辞書では神もしくは自然ということであろう。

「私」は、もちろん漱石もしくは登場人物本人のことを指す。

すなわち、自分（または漱石）を去って自然（または神）の命ずるままに行動し始めた登場人物たちによって「明暗」の物語は進んでいく。

「明暗」の人物はあたかも漱石の制御が効かなくなったかのように自由に振る舞い始める。物語が長くなる所以である。

「明暗」が完結したと仮定して、そのあとに予定された最後の長編小説はどのようなものになるだろうか。「道草」のように過去の自分のある体験を素材にしつつ、「明暗」のように登場人物は作者の趣味を離れて、以外の行動を繰り返すのだろうか。

- 1, 初恋の人との出会いと別れ
- 2, 未練 そして再会
- 3, 最初で最後の告白
- 4, 驚き同時に喜ぶ女
- 5, 初めて自分の力で勝ち取った至福
- 6, 運命による復讐と女の死
- 7, 贖罪（しょくざい）の日
- 8, 友との邂逅と最後の会話
- 9, 救いと復活（があるかないか）

まるで九つの楽章を持つオラトリオのように奏されるであろう漱石最後の作品をもって「則天去私三部作」は完成される（はずだった）。

初期 → 中期 → 晩期作品として読んでみた。

初期三部作 「三四郎」「それから」「門」

中期三部作 「彼岸過迄」「行人」「心」

晩期三部作 「道草」「明暗」「書かれなかった最後の小説」